

宮城学院の特徴について多くのことを語り得ると思いますが、確実に加えられるべきことのひとつが、大学、中高、認定こども園が、一つのキャンパスのなかに同居しているということではないかと思うのです。実際、宮城県内の私学を顧みても、東北学院、尚綱学院、仙台白百合学園など、いずれも大学、中高（小）幼稚園（こども園）を併設しながら、それらが同一のキャンパスにはありません。そのことを思えば、宮城学院は、中高と大学との連携が最も取りやすい有利な立地にあるということが言えるでしょう。事実、高校3年生は、毎週2時間、宮城学院女子大学の講義が受けられる「高大連携プログラム」を授業として組み入れています。高校に在籍しながら大学の授業や雰囲気を感じることができることは大きな恵みです。しかしながら、それから先の連携強化のプログラムがなかなか進展を見なかったことも事実です。

実際、中高と大学の連携は口で言うほど容易なことではありません。なによりも両者の時間割が異なることと、中高生は原則午後6時半に下校しなければならないからです。もちろん、中高も大学も、先生方は多忙ですから、両者の話し合いの時間を確保することさえ容易なことではありません。しかし、あれもだめ、これもだめと消極的なことを言っていては、いつまでもたっても高大連携が豊かにされていくことはありません。「隗より始めよ」ということを心掛けることが大切なことと思います。

2017年度、中高と大学の連携ということでは、一陣の風が立ちました。2013年度で廃部となった中高吹奏楽班でしたが、今年度からは中高オーケストラ班（管楽部門＝ウインドオーケストラ）という形で新たな歩みを始めることになりました。そこに音楽科特任教授の副島謙二先生を音楽監督・指揮者として迎えることができたのです。副島先生は長いこと仙台フィルでクラリネット奏者として活躍され、その間、音楽科非常勤講師も兼務してくださり、昨年度から管楽部門の強化のために特任教授として招聘された方です。温厚篤実な人柄のなかにも、40年間にわたる音楽家人生のなかで得られたすべてを注ぎ、伝えたいとの内に燃える思いを秘めて熱心に献身的に中高生を指導してくださっています。志はあくまでも高く、真にシンフォニックな響きを奏でるウインドオーケストラというところにあります。MG大の教授が、中高の部活指導に全力を注いでくださるということは、これまでの宮城学院の長い歴史のなかにもなかったことではないでしょうか。

高校生27名、中学生9名が実質的に練習を始めたのは連休明けのことでしたが、40日後の6月17日には第一回定期演奏会を持つことができました。未熟な部分はあるにしても2カ月足らずの間に砂地に水が染み入るごとく多くのものを吸収した生徒たちは、日に日に力をつけ、そのひたむきな演奏が、聴衆の心に感動の渦を巻き起こしたことでした。

旧約聖書のなかで豎琴と共に頻出するのが「角笛」です。ことに歴史の完成としての終末論的な勝利を告げる調べにはラッパが用いられています。事実、メサイア第3部の第48曲ではバスのアリアが「ラッパが鳴り響き、そして死者は朽ち果てることのないものとしてよみがえり、われわれは変えられる。なぜならこの朽ち果てるべきものは、この朽ち果てないものをつけ、死すべきものは不死のものを身につけるようになるからである」（コリントI 15章52～53節）と歌い上げますが、その時は勇壮なトランペットが吹き鳴らされるのです。

宮城学院らしい角笛の響きが、高大連携のもとにますます豊かに響きわたり、それに促されるように、様々な局面で高大連携が実質的に深められていくことを切に期待したいと思います。